これからの地域コミュニティのあり方

―盛岡市の調査を通じて―

岩手大学人文社会科学部地域政策課程

圓子 弘武

佐藤 月菜

大欠 理久

鈴木絵梨奈

1. 自治会・まちづくり協議会の活動の現状と課題

自治会・まちづくり協議会は地域にとって重要な役割を果たしている。各種イベントの開催により地域住民の居場所提供・助け合いの役割のみならず、地域の環境整備、交通安全や防犯・防災、情報伝達、公共施設の維持・管理、地域住民の意見集約機能、意見提案機能という地域住民と行政をつなぐ重要な役割を果たしている。つまり、自治会・まちづくり協議会は個人一人一人では実現することが難しいことの実現に貢献している。しかし一方で自治会・協議会の活動には多くの課題を抱えている。私たちは盛岡市における自治会・まちづくり協議会の活動に関する調査を通じて、これからの地域コミュニティのあり方について考えてみたい。

地域コミュニティが抱えている問題は多岐にわたるうえ、問題のあり方も多様で、地域によって大きく異なる。それでも、私たちが調査を通じて共通して問題であると考えた事柄を、今回の調査の対象地区である青山地区を中心に考察する。

第一に、拠点についてである。青山地区では、盛岡ふれあい覆馬場プラザを拠点に各種イベントの開催や会議、小中学校の部活動や盛岡市内や滝沢市内のクラブチームの練習、学校行事で使用されていた。拠点があることは、イベントの開催や会議に使用できるというメリットがある一方で、維持費が膨大になるということが考えられる。青山地区の活動拠点である盛岡ふれあい覆馬場プラザは盛岡市からの指定管理を受け各種イベントの開催を行っているが、維持にかかる経費やメンテナス、冬場の除雪作業は職員のボランティアによって行われている。よって、施設の管理はボランティアに頼り、維持費が負担になっていることが考えられる。

第二に、担い手についてである。自治会やまちづくり協議会の活動の担い手は固定化しており、さらには地域住民の参加を拡大させるために多様なニーズに対応する必要があり、活動の多様化により担い手の負担の増加が課題として考えられる。担い手は仕事を退職された方に限らず、仕事や家事と両立しながら自治会の活動に関わる方もいて、担い手の一部に負担が集中している。担い手が固定化、高齢化、負担の一部への集中に加え、新規の次世代の担い手が不足していることが現状である。

例えば松園地区の地区会議に参加させていただいたさい、役員の視点では若者向けの

イベントを企画しづらいため、積極的に意見がほしいというお話があった。地区のイベントを見ると、親子向けのイベントと高齢者向けのイベントが多く感じられる一方で、毎年開催されている夏祭りや、今年初開催の雪あかりなど、より幅の広い年齢層が参加できるイベントも、積極的に企画している。私がボランティアとして参加した雪あかりでは、寒い中、親子連れや年配の方などが多く参加されていた。地区が予定していた当初のターゲット層の参加が多く見られたため、初開催であることも加味すると、十分であると考えられる。ここからさらに広げていくには、アンケート等で意見を広い範囲で拾うことができる方法を、他のイベントでも活用することが必要であると考えられる。第三に、参加者の固定化と減少についてである。調査により参加者の多くが固定化していることがわかり、参加者の多くが年齢層の高い世代中心になっているのが現状である。そのためにイベントや活動の多くをお年寄り向けの企画になってしまっていて、若い世代の参加が少ないように感じた。

例えば松園地区では、地区の成り立ち故、住宅地が多く、例えば青山地区のように個人商店を持つ人など、時間に融通をきかせることができる現役世代が多いわけではない。そのため、何度も会議を重ねる必要があるイベントの運営には、引退世代が多くなる。また、イベントに参加する人の固定化についても、きっかけがあり、何度も参加する人がコミュニティを形成する一方で、そのコミュニティに新しい人が増えにくく、広がりづらいそうである。

運営に参加する人は、そのコミュニティを通して、イベントを広げていくとすると、それ以上には届かず、後からイベントの開催を知ることになり、運営に参加しづらいのではないかと考えられる。イベントに関するコミュニティが小さければ、準備段階において協力できる人が少なくなるため、このコミュニティを広げることが、より大きい規模で、地域を活性化させることができるイベントの開催には必要であると考えられる。

第四に、財政面(補助金)についてである。盛岡市からの補助金によってイベントの開催や活動を行うことができている。しかし、調査から補助金の活用方法については考える余地がある。市からの補助金は飲食には用いることができず、各種イベントでの飲み物や菓子の配布には充当することができない。青山地区の雪あかりを例に考えると、盛岡市からの補助金は開催費用の約半分に使われ、多くは地区にある企業や商店街からの協賛金、屋台の出店業者からの出店料でまかなわれている。

まちづくり協議会の方が活動する上で①担い手の固定化・高齢化②参加者の固定化・ 高齢化の他に③企画・イベントのマンネリ化、若年層や非参加者のニーズ把握が課題で あるという意見を得た。イベント数は多く内容も様々あるが、イベントの内容を毎年、 前年の反省を踏まえて、工夫しているが固定化し、新規の参加者が少ないのが現状であ る。また、参加者の多くは年齢層が高い方中心で、若年層や非参加者のニーズを把握す る機会が少ないのが課題であるということがわかった。

2.調査内容

次に、今回の調査内容を、地区ごとに記す。

2-1 青山地区

① 青山地区打合せ(9/18(金)15:00~17:00)

場所:盛岡ふれあい覆馬場プラザ

○活動内容

自己紹介、連絡先の報告、青山地区の活動の紹介、活動への質問

○気づき、感想

・青山地区の活動報告から

青山地区は1年通じて多種多様の活動をしていて、イベントへの参加人数が多い。

また、イベントには、地域の住民のみならず地域の小中学校の生徒、他地区の住民が 参加している。

・活動の運営について

活動については、まちづくり協議会の他に活動推進会、和敬荘など様々な団体によって運営されている。まちづくり協議会に関しては、一部の方の負担が大きいこと、仕事や家事との両立をしているため負担が大きいこと、運営に関しての金銭的な補助が少ないことを問題視していた。

・活動拠点について

盛岡ふれあい覆馬場プラザが活動拠点となり、イベントの開催や会議、小中学校の 部活動や盛岡市内や滝沢市内のクラブチームの練習、学校行事で使える一方で、冬場 の除雪作業や施設の維持費用がかかっている。

・あおやまあんしんマップの作成・配布

マップに青山地区にある企業などの広告を載せることで地域住民への情報発信になり、さらには、作成費の一部を工面できるなどの相乗効果があるように感じた。

・ 青山地区の様子

青山地区はもとから子育て世代と昔から住んでいる方がいる。また、多くが住宅地域と商業地域ということもあり、活動している団体が多くイベントが多く活動が積極

的である。さらには、盛岡市内の規模の大きい小中学校や高校があることから、イベントに生徒を積極的に招待するなど幅広い世代での交流がされている。また、地域のイベントには地域住民の他に青山地区にある企業や商店街に務めている方が参加している。一方で、子育て世代は仕事がありイベントに比較的参加できない人が多いように感じられた。

②認知症声がけ・保護訓練(10/25(金)13:00~16:00)

場所:西青山三丁目公民館と周辺

○活動内容

認知症声がけ・保護訓練の体験、警察署・市役所・福祉施設の方からのお話 認知症の方へのサポートについての DVD 視聴(座学)

小グループでのワークショップ→全体発表

○気づき、感想

・イベントの開催について

参加者が多く(約 100 名)、また西青山の住民の他に、警察署・市役所・福祉施設の 方、他地区の方、他の市町村の方(花巻市、北上市)が参加されていて、活動の影響力 の大きさを感じることができた。

・認知症声がけ・保護訓練の体験を通して

訓練とわかっても声がけや保護の実践は難しく、1回ではなく何度も訓練に参加することで効果が高まると感じた。また、認知症の方の保護や訓練は地域住民が一体となって事故や事件を防ぐ必要があり、そのためには、地域住民同士のつながりが重要であると感じた。

③青山地区朝市の訪問(11/16(土)6:00~7:30)

○内容

フリーマーケットや野菜・果物の産直、鉄道模型展、福田パンなど地元の店の出店 ラジオ体操(7:00~7:15)

○気づき、感想

・朝市の様子

朝6時開始だったが、参加者が多く賑わっていた。参加者はお年寄りの方が多い印象だったが、若い世代、子どもも一定数はいた。また、ラジオ体操に参加するとスタ

ンプカードにスタンプされ、景品の抽選に参加することができる。参加者の多くは青山地区に住む住民であったが、出店側は青山地区に限らず盛岡市内の他地区から来ていた。

・運営側の方からのお話から

他地区でも朝市をやりたい人もいるようなので、別地区でもこのような機会があればいいと感じた。店数や参加者数も多く感じたが、以前より出店数は減り(別の朝市に流れている)、客も固定化している。出店側の方からのお話から「以前はダイエーがあり、みんなで語り合う機会があったが、今はなくなり困っている」であるとか、「朝市以外に出店する場がなく、朝市も一年中ではないため、出店する別の機会があればいい」というお話が印象的だった。一方で、朝市が地域住民の交流の場となっているといえる。

④岩手広告景観タウンミーティング(11/16(土)13:30~17:00)

場所:盛岡ふれあい覆馬場プラザと青山地区周辺

○活動内容

屋外広告物についての事前学習、まち歩き、小グループでのワークショップ→全体 発表

○気づき、感想

まち歩きから

生活している上で普段意識せずに通っている道や使用している建物には、老朽化に

より危険がある場合も多く存在することに気付けた。また、そういった身のまわりの

危険については地域で対策をとることが重要であり、タウンミーティング等の様々な

主体の参加者の意見を交流する機会として自治会の存在の意義について考えることが

できた。

・主催側の岩手県屋外広告美術業協同組合の方のお話から

青山地区は、他の地区とは異なり地域住民、地元企業、学生といった多くの主体の

方が参加されていた。地域の課題に多くの異なる主体の人が関心を持ち意見を交流す

ることは非常に重要であるとお話しされていたのが印象的だった。

⑤青山地区雪あかり 事前ミーティング $(12/5(木)19:00\sim20:30$ 、12/11(水)19:00

 $\sim 20:00$

場所:盛岡ふれあい覆馬場プラザ

-10-

○活動内容

青山地区雪あかりの地元企業や町内会への説明、意見交換、当日の流れの確認

○気付き、感想

・運営について

まちづくり協議会だけでなく、地域住民や中学生、地元企業、地元商店街といった 様々な主体の方の協力があってはじめてイベントを開催できると感じた。また、盛岡 市からの補助金もあるが、市からの補助金は飲食用に用いることができないため地元 企業からの協賛金に頼っている部分もあると感じた。

イベントの開催について

毎年のように青山地区では、雪あかりは開催しているが、毎年同じではなく、様々な立場から意見を交流しよりよいイベント、マンネリ化にならないように心がけている様子だった。(雪だるまコンテストのフォトコンテストの実施など)

・キャンドルについて

青山地区近くのみたけ支援学校の生徒さんの作ったキャンドルを使用することで地域との関わりを大切にしてイベントが開催されていると感じた。

⑥青山子育てサロン(1/13(月祝)10:00~12:00)

場所:盛岡ふれあい覆馬場プラザ

○活動内容

青山地区の小学生(3年生以上)とその保護者(約30名)を対象にストームグラスの作成

○気付き、感想

・イベントの開催について

まちづくり協議会のイベントの参加者の多くがお年寄りであるのに対して、子育てサロンでは、働き世代とその子どもを対象にしていて、若い世代にも地域のイベントに参加する機会になっていると感じた。また、工作教室の内容を参加者の意見や希望をとって毎回帰ることで再度参加してもらう工夫をしていた。また、冬休みの終盤で自由研究や工作の宿題の時期に合わせてイベントを開催することが参加者の増加につながったのではないかと感じた。

⑦防災訓練 $(2/8(\pm)10:00\sim11:30)$

場所:盛岡ふれあい覆馬場プラザ

○活動内容

外部講師を招き防災に関わる講義の開催

○気付き、感想

・参加者

参加者の多くは地域の防災団に加入している人であった。防災訓練は万が一の火災 や災害の発生時に求められる知識を勉強する機会になり、誤った知識ではなく正しい 知識の習得につながると感じた。こうした防災訓練は災害の発生した際に自分の安全 だけでなく地域の安全を地域で対応できるためには重要であると感じた。

⑧青山地区雪あかり $(2/7(金)\sim2/8(土))$ ※準備期間 $2/4(火)\sim2/7(金)$

場所:盛岡ふれあい覆馬場プラザ

○活動内容

地元中学校の生徒によるアイスキャンドルの作成、合唱・太鼓の披露、点火式 地元企業による屋台の出店、フリーマーケットや鉄道模型の出展、ミニ四駆大会 コスプレイベントの開催など

○気付き、感想

・イベントの開催について

青山地区の雪あかりは毎年、地元中学校の生徒によるアイスキャンドルの作成およ

び点火、点火式での合唱・太鼓の披露を行っており、雪あかりは地域のイベントであ

り、学校行事であるように感じられた。2日間で約600名の参加者がおり年齢も子ど

もからお年寄りまで幅広い世代であった。まちづくり協議会のイベントに普段は参加

されない方であっても雪あかりは参加される方が多い印象だった。

⑨青山地区ワークショップ $(2/16(日)17:00\sim18:00)$

場所:盛岡ふれあい覆馬場プラザ

○活動内容

まちづくり協議会、市役所の職員、地域住民といった異なる主体で、青山地区のイベ

ント活動の総括・反省、意見の交流を行っていた。

○気付き、感想

・企画の開催について

-14-

青山地区の一年のイベント・活動についての総括・反省、意見の交流が立場を超え

て行われていた。ワークショップの参加者の多くが地域住民で、各イベントの参加者

であるため、意見がイベントに反映されることでさらなる参加者の増加、参加対象の

拡大につながるのではないかと感じた。一方で、ワークショップの参加者の多くがす

でにイベント・活動に参加している方が多く、活動の改善にはなるが、参加していな

い地域住民の意見を聞くことができず、従来イベントに参加できていない人の新規の

参加は考えにくいという印象を持った。

・意見交流から

参加者の多くが前向きな意見や検討を行っていた。人口減少や活動内容の固定化、

運営側の固定化・高齢化による負担増加があるなかで、前向きで積極的に意見を述べ

ていることは、青山地区を地域でよくしていきたいという強い想いを感じることがで

きた。

⑩活き活き健幸サロン(2/19(水)13:00~15:00)

場所: 盛岡ふれあい覆馬場プラザ

○活動内容

-15-

劇団わらび座の講師の方を招き、歌唱指導やお話を中心に活動をした。

○気付き、感想

・参加者

参加者の中には参加が2回目、3回目と複数回参加されている方もいた。イベントの開催は、まちづくり協議会だけでなく青山和敬荘の方もいたことで参加者が多くなったのかと感じた。複数の団体でイベントを開催することは、様々な視点でニーズを把握することができるため非常に有効であるのではないかと感じた。

2 - 2 松園地区

① うきうき交流会 $(9/7(\pm)10:00\sim13:00)$

場所:北松園小学校

○活動内容

竹とんぼづくり、流しそうめん、スイカ割り

○気づき、感想

-16-

・運営側について

運営側は、松園地区自治協議会の他に学校の教諭や地域住民、大学生のボランティアなど多くの異なる主体でイベントの開催されていた。参加者も多く、年齢層は子ども世代・子育て世代・お年寄り世代と多様であった。

② 第1回松園雪あかり実行委員会(11/30(土)13:30~15:00)

場所:松園地区活動センター

○活動内容

松園新聞の配布、雪あかりの内容決定、役割分担、スケジュールの決定、意見交換 ○気付き、感想

イベントの開催について

雪あかりは初めての試みということもあり、内容、時間設定はすべて新しく決める ため、松園地区の小学校へアンケート調査を行い、参加者のメインターゲットである 小学生のニーズを把握することを重要視しているように感じた。

・松園新聞の発行について

松園新聞を発行し、記事に松園地区の雪あかりの開催を載せることで地域住民に周 知されるという効果があると感じた。 ③ 松園地区雪あかり(2/9(土)~2/10(日)13:00~16:30)

場所:松園中央公園

○活動内容

雪だるま作り、アイスキャンドルの作成、アイス作り、そり、雪合戦大会、パン食い競争、餅まき、スタンプラリー、屋台の出店

○気付き、感想

- ・運営側について
- →松園地区自治協議会の他に、約20人の大学生のボランティアで運営されていて様々な方の協力があってはじめてイベントを開催できると感じた。
- ・イベントの開催について
- →雪あかりの参加者のメインターゲットである小学生のニーズを把握するために事前 に松園地区の小学生にアンケート調査を行い、さらには松園新聞で情報を発信するこ とで参加者が多かった。
- ・松園地区自治協議会の方からのお話

→アンケート調査や新聞を用いての広報の効果により当日は当初想定していた約5倍

の参加者がいた。雪合戦大会についても先着順でチームの受付を行ったがほぼ満員の

状態になり、参加者は多いと感じた。このことは、地域住民の子どもたちが遊べる場

やイベントの開催を望んでいたということが考えられ、地域の人同士の関わることの

できる機会になったのではないかと感じた。

・参加者(小学生)の様子

→参加者のメインターゲットである小学生が多く参加しており、雪あかりについて聞

くと「楽しかった」や「また、来年も参加したい」という前向きな意見が多くあげら

れていたのが印象的だった。

2 - 3 好摩地区

① 好摩地区打合せ(11/15(金)16:00~17:00)

場所:好摩公民館

○内容

自己紹介、好摩地区の活動の紹介、活動への質問

-19-

○気付き、感想

・好摩地区の活動について

環境に関するイベントが積極的である。ミズバショウ公園の整備活動、花壇の花植 えなどを行っている。もっとも、活動への参加は若い世代や子どもの参加は少なく、 お年寄りの参加が中心で参加する方も固定化している。

・運営について

活動の拠点としては好摩公民館やコミュニティセンターがある。運営側、参加者ともに固定化していて、新たに若い世代が参加することが少ない。子どもたちは週末にスポ少があり、地域の活動には参加できない人が多い。好摩地区に限ったことではないが若い世代の参加・運営が少なく、担い手不足、世代交代が少ない。

・好摩地区について

公共交通機関(特にバス)がほとんどなく、車がないと生活自体が厳しい状況である。核家族の割合が高く、世代交代が少なく、若い世代を中心に他地域へ一度転出すると戻ってくる人が少ないという課題を抱えている。参加者がお年寄り中心であるため、イベント自体もお年寄り向けが多いという印象を抱いた。

・市からの補助金について

活動の悩みの中心は人口減少や担い手不足であり、補助金による課題というよりかは、サポート体制に悩みを抱えている様子であった。活動そのものは小規模ではあるが地域住民への声がけなど必要なものに特化しているという印象を持った。

2-4 玉山地区

① 第5回玉山・薮川地区スポーツ交流会(9:30~13:00 ころ)

場所:玉山中学校

○内容

開催式

 \downarrow

競技(グランドゴルフ、輪投げ、ターゲットボード、ドッジボール*ドッジボールは、

小中学校でのインフルエンザ流行のため当日中止。)

 \downarrow

昼食会

 \downarrow

解散

○気付き、感想

参加人数は 150 人程度であった。地域の方々が多く参加されており、大盛況な様子であった。インフルエンザ流行により、子供たちの数は少なかったが、例年は子供さんの参加も多いという。グランドゴルフが 1 番人気で、毎年試行錯誤を重ね、ローカルルールを導入するなど、前向きに取り組んでいた様子が伺えた。

当日は玉山小、中学校の校長先生も参加されておられた。実際に競技に参加している わけではないが、会場の提供や地域活動に学校の先生方が参加されている点については、 地域の世代間交流にも寄与しているように感じた。先生だけでなく、生徒たちもうまく 取り込むことで、より活発に地域活動を行えるのではないかと感じた。

当日の準備・運営は地区福祉推進会が中心となり、そのほか、場所提供の中学校、道 具提供の社会福祉協議会、地区の学童施設など、様々なセクターが関わって、地域の方々 が主体となって行われていた一方で、現状、一年に主だった地域活動はスポーツ交流会 のみである。

・推進会会長のお話

毎年助成金をもらっているが、事務処理を行える人材がいないため適切な取り扱いに苦労している。具体的にどの活動にいくらの金額が使われているかについては十分に周知できていないのが現状ということである。地域で集まりを持ちたいと考えているが、実際には上記のような要因で、苦労ばかりを重ねている。特に、少子化が深刻で、今後も地域活動を続けることができるのかが不安である。実は、推進会のメンバーは、今年一新された。右も左も分からないが、自分の代で終わったと言われるのがイヤなので、頑張っている。

・地域の方のお話

1年を通して、地域で集まる機会はスポーツ交流会くらいである。しかし、この機会に、ご近所さんの様子を確認できていて良い。地域での人間関係は、災害などの際に、助け合える関係性を構築できている。スポーツ交流会は、有事の際の避難所である中学校で開催することで、防災の意味でも良い活動になっている。昼食会は炊き出しの練習にもなり、防災訓練的な要素も含まれているように感じる。しかし、何をやるにしても、財政的な安定性が必要なのではないかと感じる。

[参考資料]

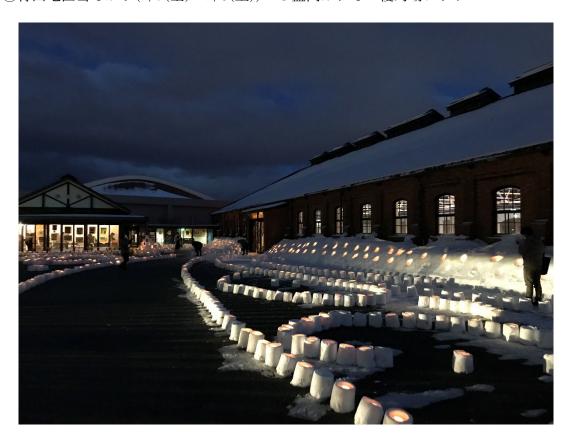
③青山地区朝市の訪問(11/16(土)6:00~7:30) @盛岡ふれあい覆馬場プラザ



⑥青山子育てサロン(1/13(月祝)10:00~12:00) @盛岡ふれあい覆馬場プラザ



⑧青山地区雪あかり(2/7(金)~2/8(土)) @盛岡ふれあい覆馬場プラザ





② 松園地区雪あかり(2/9(土)~2/10(日)13:00~16:30) @松園中央公園





⑨青山地区ワークショップ $(2/16(日)17:00\sim18:00)$ @盛岡ふれあい覆馬場プラザ









① 第5回玉山・薮川地区スポーツ交流会







3 . 考察

最後に、自治会・まちづくり協議会の現状と課題を踏まえて今後の在り方について考察する。私たちは、自治会・まちづくり協議会の維持・発展のために求められることは、地域住民、地域の学校、地域の企業、行政との連携のさらなる強化と情報発信の手段の工夫であると考える。

活動拠点の存在は各種イベントの開催や地域住民から活動の存在を知るためには重要な役割を果たしている。しかし、施設の管理や自治会・まちづくり協議会の主催の多くは一部の担い手に集中している。また活動の多くが一部の雄志によるボランティアであ

る。担い手の固定化・高齢化、新規の若い世代担い手の不足、参加者の固定化・高齢化により、地縁的なつながりが以前と比べて希薄化していることが考えられる。イベントの開催にかかる費用は市からの補助金を頼りにしていて、補助金の減額・廃止になればますますイベントの開催や活動が制限されることが予測される。

活動拠点を地域の小中学校の部活、クラブチームの練習の場に使用しているが、採算性を考え使用料の有料化、値上げといった手段は、利用客の中心である中学生の利用の減少につながりかえって厳しくなる可能性も考えられる。しかし一方で、イベントの参加者や自治会・まちづくり協議会のイベントの運営側の固定化・高齢化といった課題はあるものの、イベントを開催すれば人は集まり、参加者の多くが地域住民と関わる機会を求めていることも確認できた。つまり、自治会・まちづくり協議会はなくてはならない存在であると考える。

様々な主体や世代の地域住民が活動に参加するようになれば、参加者それぞれの意見やニーズを共有でき、住民自身一人一人が地域に関わっているという意識の定着につながると考えられる。そのためには、自治会・まちづくり協議会と地域住民、地域の学校、地域の企業との関わりをさらに強化したり、行政との連携を強化したりすることが最優先ではないか。また、調査を通してイベントの開催を知らないため参加できていない人も多く存在していることから若い世代への情報発信を強化することが参加者の増加に一定の効果があるのではないかと考えられる。

従来の回覧板や掲示板での情報提供では、日常から目を通す一部の方しか情報を得ることができなかったり、情報を得るのに回覧板の始めの家庭と終わりの家庭で差が生じてしまったりすることもあり得る。青山地区のまちづくり協議会を例にとると、まちづくり協議会のホームページや Twitter があり、これらの SNS や Web ページを活用することが従来、各イベントに参加できなかった、していなかった人に対して情報を提供できる機会になるのではないかと考える。

さらには、イベントの内容を掲載することで雰囲気を考えられ、イベントに参加する際に感じるハードルを下げることにつながると考える。また、アンケート調査にも活用することで、様々な層の方の意見を元にイベント開催、さらには、新規の運営側の担い手増加につながるのではないかと考えた。

今回の調査を通して、自治会・まちづくり協議会のイベントに参加することで多くの新たな発見があった。イベントに参加してみると、地域住民と関わることのできる機会であるのと同時に地域に対して様々な意見や考えをもつ人と交流する機会でもあることに気づくことができた。イベントに参加すると、「次はここをこうしたい」や「こうしたらもっと良いものになるのでは?」といった理想や課題、目標が自然と発生し、またイベントに参加したいという意欲の向上にもつながった。

このように参加者が多くなればなるほど様々な意見や考えがでて、担い手の増加につ ながりもっと魅力的な活動になるのではないかと感じた。また、まちづくり協議会や自 治会の方も運営側の固定化・高齢化や参加者の多くが固定化していることが一番の課題 という声を聞き、外部から人が入って感じる意見を聞く機会を希望されているという印 象を持った。

そのためにも、地域住民や自治会・まちづくり協議会・行政・企業・NPOといった様々な人が活動に参加し、何が今求められているのか、困っていることはどんなことなのか、自分たちにできることは何か、どんなイベント・活動内容だったら参加したいと感じるのか、ここに住みたい、住み続けたいと感じるのか、そのためには何が必要かを考え、意見し行動していくことがそれぞれの地区の維持・発展につながると考えた。また、複数地区に複数回調査に行くことで地区の数だけ地区の特徴があり、1つのものさしでこうあるべきとするのではなく、それぞれの地区の特徴を最大限生かすためにも自分たちの地区でできる規模で活動していくことが最も理想的であると感じた。

例えば、松園地区は雪あかりのように、多くの人が参加でき、地域が盛り上がる活動を試行錯誤し、企画しているさなかにあるように見える。それゆえ、この活動を継続することが第一であり、現在より規模を大きくすることはあっても、小さくすることはないように、活動が展開されることが望ましいと考えられるなど、地域による状況の違いも如実に存在している。

松園地区での参加者の高齢化や固定化に加えて、地区の活動予算と活動に規模について考える。基本的に、活動資金は足りているとのことであるが、令和元年度の収支

状況と会議の会話の内容では、当たり前のことではあると思うが、その予算に合わせて活動規模を調整しているようである。このことに関して、先に述べたコミュニティの形成には、既存のイベントを広げる、新しいイベントを企画するなどのことが必要であり、活動規模が小さくなれば、その達成は難しくなると考えられる。すなわち、松園地区のように人的余力のある場合には予算が増額できるのであれば活動を拡大することが可能かも知れない。

他方で、玉山地区の現状は異なる。スポーツ交流会しか活動がないのは少し寂しいが、予算の制約もあり、他の行事を開催することは難しい。推進会の会長さんのお話で衝撃だったのは、活動についての十分な引き継ぎ、継承がなされていないということであった。推進会のメンバーが一新されたとはいえ、地域コミュニティーを支える人たちの固定化によって、地域を支えるノウハウを継承することの困難性が透けて見える。「自分の代で活動が終わったと言われるのがイヤで、実施している」との発言からも、地域交流を目的とした企画・運営だけでなく、地域社会における世間体などの複雑な人間関係によって地域活動が支えられていることがよく分かる。

このことから、例えば単に地域活動の補助予算を増額したとしても、適切に運用するだけの地力が既に地域から失われている可能性が示唆される。地域の方々は、予算が足りないと嘆いてはいるものの、現状でも事務・会計処理や運営を担う人材が不足しており、こちらの方が喫緊の課題であろう。地域で事務処理担当者(会計担当者)が

いないのならば、盛岡市が代行するとか、地域の市職員が積極的に関与するなどと言った方策が必要となろう。市から、「こういう制度で補助金が出るので、何か活動をしてください」と言われても困るというのは、行事の企画・運営だけはなく、会計処理に手を焼いているということは課題として認識されるべきである。

これらの調査より、地域コミュニティにおける活動の機能と直面する課題についての一端が明らかになった。しかし、各地域で抱えている問題は一様ではない。予算の減額が地域社会に負の影響を与えることは間違いないが、人が問題の場合、予算が問題の場合、情報の周知などの工夫で活動の拡大が見込まれる場合など、地域の多様性を考慮して丁寧な対応が求められるのではないか。